

令和元年度 南三陸町高校魅力化協議会（第4回）	
日 時	令和元年12月23日（月）15：30～17：30
場 所	南三陸町役場 2階会議室
次 第	<p>1 開会</p> <p>2 挨拶</p> <p>3 議事等</p> <p>（1）委員提出意見事務局回答・・・・・・・・・・資料1（事務局）</p> <p>（2）第1期魅力化構想中間骨子・・・・・・・・・・資料2（事務局）</p> <p>（3）前回議論の意見まとめ・・・・・・・・・・資料3（事務局）</p> <p>4 その他</p> <p> ・事務連絡等（次回日程、他）</p> <p>5 閉会</p> <p><資料></p> <p>次第 「令和元年度第4回南三陸町高校魅力化協議会」</p> <p>資料1 「志津川高校魅力化ビジョン案に関する委員意見」</p> <p>資料2 「第一期志津川高校魅力化構想中間骨子」</p> <p>資料3 「第3回南三陸町高校魅力化協議会における議論」</p>
出 席	<p>委員（敬称略）：</p> <p><出席：9名></p> <p>最知明広（副町長）、齋藤明（教育長）、葛西利樹（志津川高校校長）</p> <p>山内義申（同窓会会長）、山内利也（志津川高校PTA会長）</p> <p>三浦伸俊（歌津中学校校長）、三浦馨（志津川中学校校長）</p> <p>佐藤克哉（民間）、阿部忠義（民間）</p> <p>事務局：4名（桑原調整監、山内室長、佐藤主事、佐藤陽（魅力化専門官））</p>

< 1. 開会 > (事務局)

< 2. 挨拶 > (会長)

年末のお忙しいところ、第4回協議会へ出席いただき感謝申し上げます。今月の議会で、議員から高校魅力化協議会について質問がありました。町民も含め、協議会の内容に興味を示す方が増えてきている。先週、志津川高校で町長によるふるさと講話がありました。高校3年生を対象にした講話の中で、魅力化協議会にも触れたところ、是非協議会に参加したいという生徒がいたようです。

外部からの注目度も少しずつ高くなっている中、今回で4回目の協議会ですが、今年度中に構想を完成させなければならない。今回の協議会においては、構想に向けた方針を固めたいと思っていますので、よろしくをお願いします。

< 3. 協議 >

事務局：今回の会議から事務局も議論のテーブルに付くこととなりましたのでよろしくお願いします。

(1) 委員提出意見事務局回答について

事務局より、「志津川高校魅力化ビジョン案に関する委員提出意見」・・・資料1の提出意見について回答を行った。

委員：NO5の意見に対する考え方について。中学生、保護者アンケート結果から志津川高校の学力に対する評価が低いことは現実として認識しているが、進路実績等に対する評価については、今年も就職内定100%や指定校推薦含め大学進学実績もあるように、「進路実績等に対する評価が低い」という記載の仕方は見過ごすことはできない。

事務局：「進路実績等に対する評価が低いことが読み取れる」という記載を削除します。

委員：お願いします。

(2) 第1期魅力化構想中間骨子について

事務局より、「第1期志津川高校魅力化構想中間骨子」・・・資料2について説明を行った。

委員：基本的な質問になるが、学科、コース編成については案として教養系から地域創造コース、文理系から特別進学コースに変更されているが、受験段階で「コース」それぞれに定員数を設けるのか、2、3年生の段階でコース選択するというイメージなのか。

事務局：「普通科」「情報ビジネス科」でそれぞれ入学してもらい、2年生からコース選択するイメージです。

委員：今年の高校入試の定員数等の資料を見ていると、普通科でもコースごとに定員を2つに分けている高校がある。受験の段階でコースごとに分かれるのか、例えば2年生からコース選択できるのかについては、それぞれの高校が決めることなのか。

委員：「コース」という名称を使用した場合は基本的に入試段階でコース選択することになる。「～系」や「～類」という名称だと例えば2年生から選択できるようになる。

委員：改めて志津川高校入学者推移の資料を見るとかなりショックな数字だと思う。この数字に対する危機感についてはこれまでの会議の中で皆さん共通の認識で、生徒数の目標値を決めようという話になったと思う。仮にこの推計値のまま令和6年の定員充足率が44%（53名）だったとしたら高校として成立するのか。

委員：最低でも何人必要という要件はありません。高校で決められるものでもなく、県教委の教育企画室で計画的に定員、クラス数を決める。例えば12月の段階で来年度の入学者が少ないからといって、クラス数を減らすということにはならない。

委員：県教委が定員、クラスを増減する判断基準は公開されているのか。

委員：公開されていない。

委員：女川高校の時には3年連続で充足率が60%を切った場合には、次年度以降の募集を行わなかったと思うが、現在はどうか。

委員：必ずしも同じようにはならない。

委員：現実に53人という数字だと1学年2クラスがいいところ。現実に1学年2クラス規模の高校を運営している学校はあるのか。

委員：中新田高校は2クラス。定員は2クラスで80人。

委員：その状況を踏まえたうえで、令和6年の100周年に向けて、KPIとして入学者数を100人に持っていくという認識を再度共有しておかないと、今後の議論がズレる可能性がある。

この目標を目指すのか、現状の予想推移のままでいいのか。委員全員の目標に対する目線を揃えないといけない。

今、120人の定員だから100人という数字は目指すべき数字だと思うが、まずは各委員が合意したなかで、そのための打ち手として何をしていくか。という議論をするべき。

会長：今、佐藤委員より目標値100人を目指すかどうか、まずはその議論が最初ではないかという提案をいただいた。それについて意見はあるか。

委員：志津川高校の場合2学科あるので、単純に100人という数字を目標とするには無理がある。普通科と情報ビジネス科の人数バランスがどうなのか。普通科は定員80人のうち最低限70人とすると、情報ビジネス科は定員40人のうち30人を集めなければならない。普通科と情報ビジネス科のニーズがどの程度の割合であるのか。ということも含めて考えなければならない。

委員：100人という数値の根拠、意図を確認したい。

事務局：令和6年で志津川高校100周年でもあり、100人を目標としているが、まずKPI①について。連携2中学校からの入学率72%については直近10年間で一番高かった数値を目標としております。母数が76人であり、達成したとしても55人という目標です。

KPI③の県外からの入学者数25人については、25人3クラスで75人という上限を設けることにより、寮の整備等の視点から見ても妥当と思われる。

KPI②の町外からの入学者はそこからの差し引きで20人の目標とした。直近では9人だが、令和6年までに魅力化の環境整備が整うことを期待して設定した。

委員：そういう目標設定になると全国募集と寮の設置が前提となるが、現実問題として寮を設置する財源をどうするか。町ですべて賄うのか。設置場所や運営方法等、様々な課題がある。白馬高校視察の際にその制度設計が上手くいかず、村の財政を圧迫し、難しい問題があることを確認してきた。目標として掲げるのはけっこうなことだが、そのような現実部分を考えなければならない。その辺りはどのように考えているのか。

事務局：寮については後程の資料で説明する。全国募集をやらなければKPIで目標設定している25人が0人になる。令和6年に最大でも75人になる。3クラス維持を目指すのであれば全国募集は視野に入れるべき。

おっしゃる通り、財源の課題はあるが、例に出された白馬高校については、募集人数の上限を決めなかった為に起こった問題であり、我々は当初から上限を決めたうえで、財政面でも計画的に検討していくため、問題になるとは考えていない。

財源の確保については町からの財源だけではなく、同窓会の協力やクラウドファンディング、サポーター制度等を使って新しい財源を獲得するような方策を考えている。

委員：現実的に県外から生徒を呼ぶということは住む場所が必ず必要。クラウドファンディングや同窓会のお金をあてにして現実的に寮ができるのか。

また、白馬高校の場合はスキーの強豪校という魅力があり、全国から生徒が集まる環境が以前からあった。志津川高校はそういった魅力がないなかで、全国募集を計画として挙げるのが妥当なのか。慎重に考えなければならない。

委員：現実的に考えれば葛西委員のおっしゃる通りと思うが、そうなる何と何も手を打てないということになる。生徒数が減っていくことをただ眺めるだけになるがそれでいいのか。

生徒達は学校規模（生徒数）を気にする。規模の大きい学校へ行き、沢山の友人をつくりたいという生徒達の気持ちは変えられない。だから何か手を打って、外からでも生徒を受け入れることを考えなければいけない。難しいことは理解するが可能性をひとつでも探っていかなければ現状は何もかわらない。

委員：3クラスを前提に考えるのであれば、100人は妥当だと思うが、100人のうち約半分を町外から呼ぶことは大変な目標値だと思う。

いずれにせよ町内の生徒で賄いきれないのは明確である。目標値を定めたとして何を目玉とするか。資料では地域創造コース、特別進学コースと情報ビジネス科を構想しているが、この取り組みで全国から生徒を呼び込めるのか。

全国からわざわざ南三陸町に足を運ぶ魅力がこのコースにあるのかどうか。環境整備は大切だが、生徒達にとって本当に魅力的な学科やコースであれば、寮がなくとも生徒は集まると思う。事務局としてどのように考えているか。

事務局：事務局として高校魅力化の柱になるであろう部分として新たな学科を考えている。

具体的には、普通科と情報ビジネス科の2学科を踏襲して考えている。ひとつめは普通科のニーズがこれまでのアンケートから、かなり高いと予想される。

中学生から高校生にあがる過程で、将来やりたいことが決まっていない中学生が多くいることは間違いない。その中で、普通科と情報ビジネス科それぞれで共通することですが、プロジェクトベースラーニングというものを意識して考えを深めていく必要がある。机の上だけで学ぶのではなく、地域課題を題材としながら、考えを行動に移す。といった学習が実際の社会へ出たときに役立つと思われる。

今年3年目の志高まちづくり議会の取り組みについても非常に有効だと考えている。志津川高校の魅力は地域との連携。「おらほの学校」が一番の魅力になると思っているので、「地域を題材にした学び」を学習の核にしていきたいと考えている。

情報ビジネス科については、資料にある説明はかなり抽象的な説明になっている。具体的に何をやるのかという、現状ではお示しするものはない。ただし、現在はプログラミング教育が小学校でも始まっている。そういった社会的ニーズの背景を踏まえて

も取り組み方によっては非常に可能性のある学科だと思うので、情報ビジネス科を残しながらさらに魅力を深めていくことを考えている。

委員：理念的なものはわかるが、今の説明で一般の人が魅力を感じることができるのかが課題になる。

委員：まさに今の話が本質だと思う。方向性を決めて目標を定め、課題を検討していくことをチームとして考えていく。学校、民間、町が一体となり、高校の魅力化へ向けた方向性を合わせたうえで話合う場が今のこの場所だと思うが、その認識で合っているか。

事務局：おっしゃる通り、令和6年までの計画の中で、今この場で、例えば魅力的な学習内容などの各論を議論するのは難しい。

まずは志津川高校の現状を変えなければならないのか、このままでよいのか。事務局としてこのままではいけないという認識を持っているが、この部分について委員全員の共通認識のもと議論を進めていきたいと思っている。

会長：皆さんそういった認識でよろしいか。

もともとは総合戦略会議において、志津川高校がなくなったら町に元気がなくなるとの声がきっかけとなり、魅力化の取り組みに繋がっている。100人は厳しい目標だと思うが、何もしなければ生徒数が50人や60人に減少することは目に見えている。

目標に向かって委員全員で足並みを揃えたうえで、建設的な意見をいただきたい。

委員：志津川高校は昔から人気のない学校ではなく、この地域にはなくてはならない存在で、10年前は進学率70%を誇っていた。

今の南三陸町は当時の南三陸町とは違う。昔のままの取り組みでは進学率は変わらない。当時の南三陸町にはなかった魅力、例えばラムサール、FSCやASCなどの魅力を全面に打ち出していけば、町外や県外から生徒がくるのではないか。ASCのカキについてはICTを活用しデータ分析をおこなっているが、情報ビジネス科の取り組みに繋がるのではないか。他地域から見るとすごく魅力的な素材が今の南三陸町にあるのではないか。

また、台湾やチリなどの交際交流を行っているが、英語の学習が必要になる。これらは10年前の志津川高校、南三陸町にはなかったことなので、現在の環境を活かした取り組みをしていけば、魅力的な志津川高校が復活するのではないか。

委員：志津川高校には「真・和・敬」というすばらしい理念がある。校名を変更することになればこの理念も変えなければならないことに覚悟が必要になる。

女子野球については良いことだと思う。100周年に向けて全国を目指し、町内の松原グラウンドなどで練習に励む生徒の光景を町民や中学生が見たときに、応援しようという

気持ちになり、マスコミにも注目される。町全体に活気が出るのではないか。まず、女子野球部で活気をつけて、次の魅力化のステップに進むという方法も良いのではないか。

委員：英語とパソコンが学べるカリキュラムが良いと思う。情報ビジネス科でネット販売をおこなっていると思うが、南三陸町には素材が沢山あると思う。そういった授業ができる高校だと周知すれば全国から生徒が集まると思う。

先ほど話にあった校名を変更することについては、変更が決定されたような話の流れであったが、簡単に変更できるものではなく、同窓会としても広く意見を聞かなければならない。

委員：定員は100名が妥当だと思う。集める手段はこれからはしろ、目標値は設定すべき。また、親として思うことは、昔は様々な中学校から生徒が集まり、新しい出会いが沢山あった。町外にしろ、全国にしろ、他の地域から人が集まれば地元の生徒達の良い刺激になると思う。

会長：ひとつ共通認識を持っていただきたいのは、これからアクションを起こしていかなければ、志津川高校入学者推移のようなショッキングな状態になってしまうこと。

数値的には厳しいが、100人という目標に向かって何かしらの手を打っていくということを前提でこれからやっていくことに了解をいただきたい。

校名変更やコース、カリキュラム等の具体的な部分についてはこれから先の話になってくる。構想自体は今年度中に作成し、県教委とも話をしていくので、この資料にある内容が必ずしも決定事項ではない。

事務局より資料2の続きを説明（タブレット導入等）

委員：タブレット導入はすごく良いと思う。うちの娘も自宅学習ではタブレットを使用している。これからは当たり前になってくる。

事務局：トライアル期間が7月まであり、一旦トライアルでやってみた成果を見てから、補正予算で計上しても十分間に合う。予定しているタブレット導入についてはLTEタブレットとあって、皆さんがお持ちの携帯電話のように、学校の中だけではなく、家に持ち帰っても使用可能です。

委員：学校側としては本当にありがたいご提案です。

会長：中学校側としてはどうですか。

委員：中学校としては準備期間が必要。いずれやらなければいけないことは理解しているが、

今すぐには対応できないと思う。まず授業がまったく別のものになる。今までの授業の形では進めることができない。もし導入するのであれば、専門の職員の増員等を検討しなければいけない。

委員：導入後の見通しが必要。利用率等により打ち切りにならないのか。もし導入されるのであれば、事務局の話にあったよう学校外でも自由に使用させたい。

破損させた場合の保証等、課題がクリアになれば中学校としては導入してほしい。

事務局：タブレットを導入することが目的ではなく、導入することによって例えば学力の向上だったり、先生方の負担を減らすことが目的です。

授業のすべてをアナログからICTに変えましょうという話ではない。トライアル期間の前に先生方に活用内容を伺いながら今後の計画を立てていかなければならないと思います。また、現段階で例えば半分の授業で必ずタブレットを使用する等は想定していません。

委員：ICT支援員の増員は必ず必要。スタート段階ではコーディネートする人がいないと担任などに負担がかかる。

事務局：機器操作のレクチャーや通常発生するトラブルについては考えなければならないと思っています。

ICT支援員については、小、中の義務教育段階で国の予算で対応してもらえる。ICTの施策はおっしゃるとおり先生方のサポート体制があってこそできるもの。高校段階においても先生方に確認しながら検討していく。

会長：委員の皆さんの意見を聞くと環境を整えば是非導入してほしいという意見が多かった。事務局として今後の検討をお願いします。

事務局：小、中学校にタブレットが導入されたことを前提ですが、連携2中学校から志津川高校へ入学してくる際に小、中学校で学んだことをデータとして引継ぎできるようにすれば、連携中から志津川高校へ入学することのインセンティブになると考えている。学習の中身を連携することにより、よりいっそう中高連携に意味を持たせることができる。

事務局より資料2の続き（公営塾）を説明

委員より志翔学舎業務報告書を説明

委員：説明の中で、進学する生徒は学校で自学し、学び直しを志翔学舎で行っているというこ

とでよろしいか。

委員：明確に分けているわけではない。

委員：志翔学舎は大学進学を目指す生徒のために設置したと聞いていた。町のお金を使い運営しているなかで、志翔学舎のあり方をもう一度はっきりしないといけない。

委員：志翔学舎の狙いの中にはもちろん大学進学もあるが、中学校段階までの学び直し、高校の授業の予習、復習も含まれている。大学進学だけが取り組みの柱ではない。

委員：志翔学舎について。キッズドアの皆さんが小、中学生を対象とした「ただゼミ」をおこなっている。休日に生涯学習センターを利用して英語や実力テストの対応に取り組んでおり、学びの環境をつくっていただいている。

これだけ学習の環境があるなかで、どうやって利用率を増やしていくか。このような小、中からの取組をどうやって高校の志翔学舎へ繋げていくかが課題。

委員：志翔学舎の利用率が低いのは先生方が放課後でも親身になって生徒達のために学習のサポートをしているという理由もあり、これはとても良いことだと思う。

会長：志翔学舎の運営には年間で町のお金がかかりかかっている。設立の目的は学力向上という生徒と保護者の声を受けてのもので、現状の志翔学舎については町の投資が無駄になっていると感じる。

今回の提案に記載しているが、来年度からすぐにでも登録制やコース制にしていくべき。現状のまま間違った方向で志翔学舎を利用されてはならない。

登録制にして大学進学と学び直しをわけ、学習場所が一つしかないのであれば、時間差で学習するなり、工夫をして本来の目的に沿った志翔学舎へしなければならない。

委員：志翔学舎の目的はその通りだと思う。

現在はAO入試が中心になっているが、一般入試を視野に入れていくのであれば、志翔学舎をどう利用していくかを戦略的に考えるべき。

これから全国募集を視野に入れるのであれば志翔学舎もひとつの魅力として大事な要素となる。

委員：大学進学に対する指導はそれなりの専門性がなければできない。専門性をもっているのはやはり教員。教員はその専門性にプライドを持っているので、自分のクラスの生徒に対しては、課外での学習指導に力を入れており、どうしてもそれが主になっている。この部分を学校として志翔学舎にすべてお願いすることはできない。志翔学舎で専門性をもったスタッフを配置していただけないと難しい。今後はキッズドアと協議していきたい。

委員：現状としては学び直しに力が入っているという認識でよろしいか。

委員：そうです。

会長：志翔学舎が学校にあるというメリットはあるのか。

委員：部活が終わった後にすぐ利用できることは、学校内にあることのメリットのひとつです。ただ、BRTの駅が近いという理由で生涯学習センターを利用する生徒も多い。

会長：厳しい話をしたと思うが、やはり志津川高校として志翔学舎をさらに魅力あるものにするために、再検討していくことで了解を得たい。

それでは時間となったため、今回会議は終わりとしたい。本来であれば協議をもっと進めたかったが、次回会議はこの資料の12ページ以降から協議したい。資料3の前回議論の意見まとめは各委員お目通しいただきたい。

事務局：今回会議では12ページまで進みましたが、それ以降もかなりボリュームがありますので、可能であれば協議会の回数を1回増やしたい。

委員：12ページでどうしても訂正いただきたいことがある。現状と課題のなかで「小、中、高連携した取り組みはほとんどありません」とあるが、これは失礼な話で、小、中、高合同で吹奏楽や子供ラムサール取り組みをおこなったりしている。「小、中、高の連携が一層必要です」等に訂正いただきたい。

事務局：訂正します。

会長：事務局よりあと2回の会議ではまとまりそうにないので、1回増やしてはどうかと提案がありましたがいかがでしょうか。

委員全員：了解

事務局：日程調整についてはまた追って連絡させていただく。

< 4. その他 >

事務局より次回会議の日程確認について説明

～閉会～